Rural Nai (Barber Caste) in North India : From the Case of Hardoi District, Uttar Pradesh

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5136

北インドのナーイー(「床屋」カースト)

——ウッタル・プラデーシュ州ハルドイ県の事例から——

鹿　野　勝　彦

1　はじめに
2　対象地域の概況－ロダウラとその周辺
3　地域社会におけるナーイー
(1)　カーストとしてのナーイー
(2)　「床屋」としてのナーイー
(3)　ナーイーの位置づけと特徴
4　おわりに

1　はじめに

本稿では、インド北部の農村地域におけるナーイー(Nai いわゆる「床屋」カースト)の役割と位置づけを、ウッタル・プラデーシュ州中央部の、ハルドイ県サンディラ郡バラワン開発区(Hardoi District, Sandila *Tahsil,* Bharawan *Vikaskhand*)の事例から具体的に記述し、考察することを通じて、南アジア農村社会のありかたの一側面を検討することを目的とする。[1)]

南アジア農村社会の最大の特徴が、その構成員が多数のカースト(ジャーティ *jati*)に分かれており、かつ異なるカースト成員は、一方で相互にきびしく区別、隔離されながら、他方ではむしろそれゆえに緊密に補完し、依存しあう関係にあることには、おそらく異論はあるまいと思われる。このことは、ヒンドゥー教徒が多数を占める地域社会以外においても、おおむね妥当するといってよい。[2)]そこで、南アジア農村社会を対象とする社会人類学的研究においても、異なるカースト成員間の関係をどのように理解するかは、今日まで主要な課題の一つであり続けている。これらの研究の多くは、具体的には地域社会を複数カースト成員よりなる構成体として把え、村落レベルでの異カースト成員間の関係を、経済、政治、社会、儀礼、宗教など、さまざまな側面から分析することによって、南アジア農村社会を理解するための枠組をつくりあげようと試みてきた。そして、そのほとんどは、村落の人口の多数を占め、経済的にも、政治的、社会的にも地域において優位にある、いわゆる「支配的(dominant)カースト」、すなわち実質的には農村の基本的生産手段である土地の大半を所有、支配する農民が属するカーストを、その視野の中心におき、[3)]彼らとそれ以外の諸カースト(すなわち商業、手工業、サービスなどをいわゆる「伝統的」職業とする諸カースト群)との関係を、主に前者の立場から分析してきたように思われる。いいかえれば、後者は一般に、農村の周辺的存在として、農民である支配的カースト成員との関係においてのみ把えられてきた。このことは、農業が生業として圧倒的に重要である農村地域を対象とする研究においては、ある程度止むをえない

ことであったかもしれない。しかし、南アジア農村社会の特徴を全体的に把握するためには、農民とならんで、もう一つの重要な構成要素である、さまざまの非農業部門をになう諸カースト側からの研究が乏しいのは、片手落ちの感を否めない。[4)]

これら、大まかに「職人」ないし「サービス」諸カーストとまとめうるカースト群の側に視点をおいた研究がもつ意味としては、具体的には、以下の2点を指摘しうる。第1には、彼らは各々の「伝統的」職業と結びついた独自の役割と文化を保持しており、それらは地域の支配的農民のそれに単に従属しているというより、異質で、しかも地域の文化の不可欠の一部を構成している。第2に、彼らは「伝統的」職業たる商業、手工業、サービス等を通じて、しばしば農民以上に地域社会の中で広域のネットワークを作りあげている。したがって、彼らの実態を把握することによって、農民を中心に見ていたのでは充分に理解しえない、地域社会内部での文化の多様性や、都市などとの関連を含む広域の中での地域の位置づけ、性格づけが可能となってくるとも、考えられるのである。

ところで、農村社会における「職人」ないし「サービス」カーストといっても、その内容は著しく多様である。[5)]本稿で特に「床屋」カースト(ナーイー、地域によりナウ Nau、ナピット Napit、ナーヴィタール Navitar などとよばれる)を取りあげたのは、主に以下のような理由による。まず、これら諸カーストを主対象とした研究は、すでにのべたように全体として乏しいが、その中でも、商業、手工業など、具体的なものを扱うことを「伝統的」職業とするカースト群(例えば鍛冶屋、大工、土器つくり、織物、革加工などを職業とする諸カースト)に比べ、[6)]もっぱら対人的なサービスを「伝統的」職業とするカースト群(床屋、水運び、楽師、洗濯屋、清掃などを職業とする諸カースト)についての、具体的な資料に基く研究の例は、より少なかったといえる。[7)]とりわけ、「床屋」カーストについては、その分布が、南アジア農村ではほぼ普遍的であり、その社会的、儀礼的役割の重要性、不可欠性が多くの文献において指摘されているにもかかわらず、[8)]その実態は、一般に農民との関係において断片的に記述されるにすぎず、その具体的な実態については、あまりあきらかにされていない。

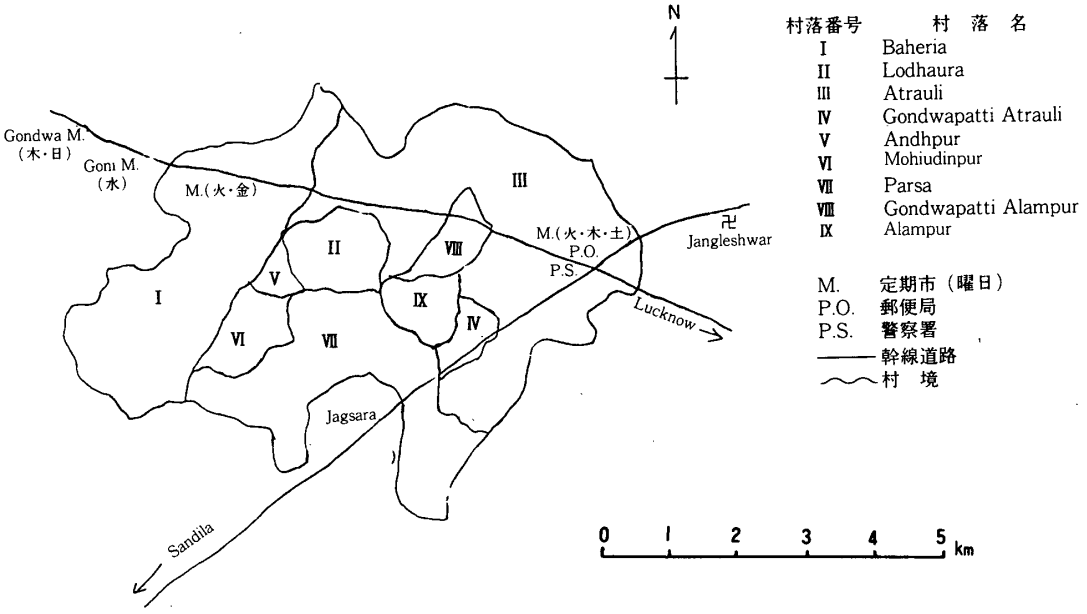
以下では、本稿の記述の対象となる地域の概要を略述したのち、そこでのカーストとしてのナーイーの分布、職業構成等をあきらかにし、現実に「床屋」に従事しているナーイーの活動をできるかぎり具体的に述べる。ついで、地域社会におけるナーイーの経済的、社会的役割と位置づけを、主に他カースト成員との経済交換に注目しながら検討する。

本稿の内容は、調査期間の短かさ、筆者の能力の限界等から、資料の定量的精密さを欠き、またナーイーの関与する儀礼の意味づけを充分に行いえなかった点などから、全体として初歩的な試論の域を出ていないが、上述のように既存の研究の乏しい現状では、南アジア農村の地域社会の体系を、従来とやや異なる視点から把えなおすきっかけを提示するうえで、ささやかながら意味をもちうると考えられる。

2　対象地域の概況－ロダウラとその周辺

本稿で直接対象とする地域は、バラワン開発区の中でも、筆者が集中的に調査を行ったロダウラ(Lodhaura)村とその周辺の、個々に独自の名称をもつ39の自然村(集落)を含む９つの行政村の範囲で、面積は約30Ｋ㎡におよぶ。[9]対象地域をこのように設定したのは、第１には、この範囲はロダウラ村を中心とする半径約３㎞の円内にあって、これは村人が日常的に往来する行動圏とおおむね一致すること、第２には、後述するように、特に集中的に聞きとりを行ったロダウラのナーイーにとって、この範囲が、密接な経済的、社会的関係を結んでいる世帯の分布する限界とほぼ一致すること、などによるもので、この地域自体がなんらかの完結した単位性を有しているわけではない。ロダウラ周辺をはじめとするサンディラ郡バラワン開発区の概況については、すでにある程度の報告はなされているので、[10]以下では本稿にとって必要最小限の記述を行うにとどめる。

対象地域の村落の位置関係、面積、世帯数、人口その他の基礎的数値を、1981年の統計に基いてまとめると図－１および表－１のようになる。



図－１　対象地域

村落番号	村落名	集落数*	面積(ha)	耕地面積(ha)	耕地比率(%)	世帯数	人口
I	Baheria	11	906	667	73.6	693	3,696
II	Lodhaura	2	125	106	84.8	117	637
III	Atrauli	14	1,225	925	75.5	941	4,369
IV	Gondwapatti Atrauli		85	62	72.9	63	317
V	Andhpur		30	20	66.7	16	71
VI	Mohiudinpur	9	84	68	81.0	45	236
VII	Parsa		548	427	77.9	412	1,969
VIII	Gondwapatti Atrauli	2	71	60	84.5	27	145
IX	Alampur		98	78	80.0	122	645
計		39	3172	2,413	76.0	2,436	12,085

資料：CENSUS OF INDIA 1981による
*　1989の実地調査による

人口密度　381/㎢
$\frac{\text{灌漑面積}}{\text{耕地面積}} \times 100 = 46$

表－1　対象地域の概況（1981）

この地域は全体として平坦で、耕地面積は全面積の4分の3強を占めるが、水利は必ずしも良くなく、灌漑地は全耕地の2分の1に達しない。集落は一般に集村の形態をとり、規模は5戸前後から200戸以上までとかなり差があるが、100戸を超える集落は少く（39のうち8）、大半は40戸～60戸程度と比較的小規模である。

この地域は州都ラクナウ（Lucknow）から直線距離で50㎞あまりで、交通の便も比較的良いにもかかわらず、地域の主要な生業は今日でも農業、それもコメ、コムギ、その他の雑穀（ジョワール *jowar*、バジュラ *bajra*）などの自給用穀物を主作用とする農業である。換金作物としては、サトウキビ、ピーナツ、それに近年では改良種のグアバ、マンゴー等の果樹が、近隣でさかんに栽培されているが、この地域に関する限りは、それらの導入も、まだほとんど進んでいない。また、ラクナウなど都市へ出稼ぎに行き、ないし職を求めて流出する者は少くないが、在村のまま通勤する者は稀である。地域内には、近年、交通の要衝として、また行政や経済的流通の中心として発展してきたアトラウリ（Atrauli）のような集落もあり、変化の兆は見てとれるにせよ、全体としてこの地域は、なお、いわゆる「農民社会」的性格を色濃く残しており、地域の経済的、政治的実権は、土地を所有し、そこで自給用穀物を主に栽培している、在来の地主、自作農層の手中にあるといえる。具体的には、この地域では、世帯の規模や土地の質にもよるが、一般に2ha程度の耕地を所有していれば、世帯は自給用の食糧を確保した上で、余剰分を交換用にあて、生活を維持できる、とされている。しかし、このような水準にある世帯は、おそらく全体の4分の1を大きく上まわることはない。[11)]

カースト構成からみると、この地域にはイスラーム教徒(ムスリム)を別として、確認しえた限りで、24のカースト成員が居住している。[12)]対象地域に居住するカーストと、その「伝統的」職業、および現状での主な実際の職業などをまとめると、表－2のようになる。

カースト名	「ランク」	「伝統的」職業	実際の主な職業	対象地域内の分布	
				A	B
Brahman	I	司祭	農業(地主、自作)、司祭、賃労働	20	7
Thakur	II	戦士	農業(地主、自作)	8	3
Kayastha	III	書記	農業(地主、自作)	3	
Yadav	IV	牧牛	農業(自作)	11	3
Kurmi	V	農業	農業(自作、小作)	2	
Gaddi		牧牛	農業(自作、小作)	2	1
Bania	VI	商業	農業(自作)、商業(仲買)	6	
Gadariya		牧羊	農業(自作、小作)	3	
Murao		野菜栽培	野菜栽培	2	1
Sonar		金銀工	金銀工、商業(行商)	1	
Barhai		大工	大工、農業(自作、小作)	8	
Kumhar		土器つくり	土器つくり	4	
Lohar		鍛冶	鍛冶	2	
Nai		床屋	床屋、農業、(自作、農業労働)	7	
Bhurji		穀物焙煎	穀物焙煎	9	
Teli		搾油	農業(小作、農業労働)	9	
Palwa		農業	農業(自作、農業労働)	1	
Bairag		占星	不明	1	
Kahar	VII	水運び	農業(小作、農業労働)	5	
Arakh		葉の食器製作	農業(小作、農業労働)	35	15
Dhobi(s.c.)	VIII	洗濯	農業(農業労働)、洗濯	11	2
Nat(s.c.)		石工	石工	1	
Chamar(s.c.)		革加工	農業(農業労働)、革加工	27	12
Dhanuk(s.c.)		竹製品製作	竹製品製作、農業(農業労働)	6	
Muslim			農業(自作)、仕立、商業	9	1

・「ランク」「伝統的」職業は地域のブラーマンの評価、区分による
・分布Aは居住する集落数、Bはそのカーストが集落で最大の世帯数を占める集落数を示す(一部集落では複数カーストが最大となる)
・s.c.――「指定カースト」(scheduled caste)

表－2　対象地域のカーストの概況
(資料の一部は溝口常俊氏による)

表－2からある程度よみとれるように、この地域では、ブラーマン(Brahman)、タクール(Thakur、ラジプートと同義)、ヤダヴ(Yadav)などの諸カーストは、それぞれ特定の集落にかなりまとまった数の世帯が居住し、その集落ではいわゆる「支配的」カーストとしての地位を占めている。またガディ(Gaddi)やムスリムがそのような地位を占める集落も、例外的に

みられる。カヤスタの場合、世帯数も居住する集落数も少ないが、その世帯が集落内で占める地位はタクールやヤダヴに準ずる。これに対して、バニア(Bania)、バライ(Barhai)、クマール(Kumhar)、ロハール(Lohar)、ナーイー、ブルジー(Bhurji)、ダヌク(Dhanuk)などの諸カーストの成員は、一般にかなり分散して居住しており、一集落内のこれらのカーストの世帯数は1～5がふつうで、10をこえることはまずない。多くの世帯は、いわゆる「伝統的」職業か、なんらかの形の農業(小規模な自作、小作、農業労働)、あるいはその組み合せによって、生活を維持している。一方、アラク(Arakh)、チャマル(Chamar)などの成員は、大部分の集落に、かなりまとまった数の世帯が居住しており、世帯数の上では相当数の集落で最大のカーストとなっている。しかし、これらのカースト成員は、そのほとんどが小作、農業労働を主要な生業としており、またいわゆるカーストの「伝統的」職業にも、ごく一部の世帯しか従事していない。むしろ不定期の賃労働や小規模な行商などが、補助的な職業として重要であるといってよい。カハール(Kahar)、テリ(Teli)、ドビ(Dhobi)などのカースト成員は、分布、世帯数などはより限定されているが、経済的な状況は、ほぼ同様である。

この地域の世帯を経済的な観点から大別すると、おおよそ3つのカテゴリーに区別しうる。

〈1〉 自給レベル以上の地主、農民世帯。すなわち、世帯あたりほぼ2ha以上の土地を所有し、そこでの農業経営により生活を維持できる世帯。

〈2〉 商業、手工業、サービス等、いわゆるカーストの「伝統的」職業、又はそれと小規模な農業(小作、農業労働を含む)の組み合せによって生活を維持している世帯。

〈3〉 主に小作、農業労働によって生活を維持している世帯。

ここで第2、第3のカテゴリーの世帯が従事している商業、手工業、サービス労働の主要な顧客は、第1のカテゴリーに属する地主、農民であり、また小作、農業労働も第1のカテゴリーの世帯の所有する土地を前提としているので、結局、第2、第3のカテゴリーに属する世帯は、経済的には、なんらかの形で、第1のカテゴリーに属する世帯に依存していることになる。[13] 個々の世帯を例にとれば、これらのカテゴリーの境界上に位置づけられる場合も少くないであろうが、この地域全体としてみれば、第3のカテゴリーに属する世帯が過半数を占め、第2のカテゴリーの世帯とあわせれば、その比は全世帯の4分の3に近いと見てよいであろう。[14]

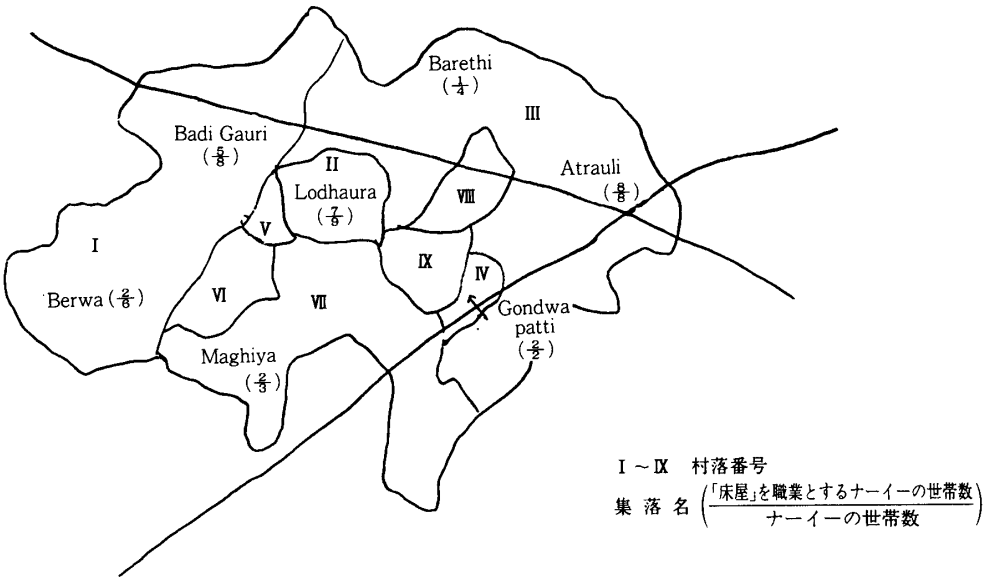
上述のカテゴリーとカーストとは、いうまでもなく、もともと全く異なる分類概念である。しかし、この地域においては、現実には両者の関係がかなり密接であることも、否めない事実である。本稿で直接の対象とするカーストとしてのナーイーの世帯は、後述するように、その大部分が第2のカテゴリーに属している。以下では、この地域におけるナーイー・カーストの実態をのべてゆくこととする。

3　地域社会におけるナーイー

(1)　カーストとしてのナーイー

ナーイーという語は、カーストを意味する場合と、職業としての「床屋」に従事する人を意味する場合とがある。この地域においては、ナーイー・カースト以外のヒンドゥー教徒が「床屋」を職業とすることはまずありえないといってよいが、ムスリムの中には「床屋」を職業とする者がおり、彼らも又、ナーイーとよばれることがある。[15]ただし、「床屋」としてのムスリムの活動の場は、この地域では、定期市や町の常設の理髪店などに限られており、かつ、彼らは、ナーイー・カーストの「床屋」が実際に果たしている機能のすべてを果たしているわけでもない。本稿ではナーイーという語は、カーストとしてのナーイーの意味に限定しておく。[16]

本稿で対象とした９つの行政村の範囲内に居住するナーイーは40世帯で、７つの集落に分散している。このうち、いわゆるカーストの伝統的職業である「床屋」に、なんらかの形で実際に従事しているのは、27世帯である。その分布状態を示したものが、図－２である。



図－２　ナーイーの分布

図－２で見るように、この地域では、ナーイーは５～６の集落に１ヵ所の割合で、比較的均等に分布しており、かつ、すでにのべたように、特定の集落に多くの世帯が集中するといったことは、見られない。[17]ナーイーの占める、地域の世帯全体に対する比率は、おそらく、１％強と考えられる。[18]このようなナーイーの分布がどのような経過を経て形成されたかはあきらかでない。しかし、現在この地域に居住するナーイーに関する限り、その世帯主が集落内で分出した例は少くないが、集落外から転入してきた例は、少くとも３世代以内ではしられていない。要するにこの地域におけるナーイーの分布は、今世紀はじめから現在まで、ほぼ安定した状態にあったとみてよいように思われる。こういったナーイーの分布のありかたからすれ

世帯番号	居住地 村落	居住地 集落	世帯構成関係 既婚男性	世帯構成関係 続柄	世帯の職業（1.主な職業、2.第1の副業、3.第2の副業） 床屋	農業 自作	農業 小作	農業 農業労働	賃金労働	商業	その他	備考
1	Baheria	Berwa	1		2	1						
2	〃	〃	2		1	2						
3	〃	〃	2			1					2	アユルヴェーダ医師
4	〃	〃	1			2			1			公務員
5	〃	〃	3			2			1			公務員
6	〃	〃	1						1			公務員
7	〃	BadiGauri	1			2			1			公務員
8	〃	〃	2		1	2						
9	〃	〃	2		1	2						
10	〃	〃	2		2	1						
11	〃	〃	2		2	1						
12	〃	〃	1		1	2						
13	〃	〃	1			2		1				
14	〃	〃	1			2			1			教員
15	Lodhaura	Lodhaura	2		1		2	3				
16	〃	〃	1		1		2					
17	〃	〃	1		1	2						
18	〃	〃	2		1	2						
19	〃	〃	1		1	2		3				
20	〃	〃	2		1	2						
21	〃	〃	1		1	2						
22	〃	〃	2				2		1			公務員
23	〃	〃	1			1						
24	Atrauli	Atrauli	1		2	1						
25	〃	〃	1		2	1		3				
26	〃	〃	1		2	1		3				
27	〃	〃	2		1	2		3				
28	〃	〃	1		2	1						
29	〃	〃	2		2	1		3				
30	〃	〃	1		2	1		3				
31	〃	〃	1		1	2		3				
32	〃	Barethi	1			1				2		
33	〃	〃	1			2			1	3		教員
34	〃	〃	1			1		2				
35	〃	〃	1		2	1		3				
36	Gondwapatti Atrauli	Gondwapatti	1		1	2		3				
37	〃	〃	1		1	2						
38	Parsa	Maghiya	3		1	2						
39	〃	〃	1			1		2				
40	〃	〃	2		1	2						
	既婚男性 1		25	親	17	15		1	7			主な職業
	既婚男性 2		13	子	10	21	3	2		1	1	第1の副業
	既婚男性 3		2	兄弟				10		1		第2の副業
	計		40		27	36	3	13	7	2	1	計

表－3　ナーイー世帯の構成と職業

ば、「床屋」としてのナーイーと、他の住民との関係は、個々の集落内では完結しえず、近隣の集落に住む人々との間で、連鎖的なネットワークを形成することが、半ば必然的であると考えられるが、この点については後に検討する。

対象地域に住むナーイー世帯の世帯構成(確認しえたのは世帯内の既婚男性数と、その続柄)と、実際に従事している職業をまとめると、表－3のようになる。

表－3から、この地域のナーイー世帯の約3分の2は既婚男性が1人しかいない、核家族的構成をもつ世帯、約3分の1は父と息子の1人が同居する直系家族的構成をもつ世帯で、それ以上複雑な構成をもつ世帯は例外的であることがわかる。

ナーイー成員が実際に従事している職業についてみると、世帯レベルでは、その3分の2がカーストの「伝統的」職業である「床屋」を、主な職業、ないし第1の副業としている。ただ、「床屋」からの収入のみで生活を支えている世帯が1戸も存在しないことにも注意しておきたい。この地域では、90%のナーイーの世帯は、多少とも土地を所有して農業を行っており、これに小作や農業労働を加えれば、1戸をのぞくすべてのナーイー世帯が、なんらかの形で農業に従事していることになる。もっとも、その土地所有の規模はきわめて零細で、この地域での平均的自給ラインと目される2ha以上の土地を所有している世帯は存在しないし、1haをこえる世帯も2例のみ(世帯番号3、32)であり、ほとんどは0.5ha以下の土地しか所有していない。また、比較的安定した、耕作期ないし年間契約による小作よりも、不安定な日単位の農業労働への依存が強いこともみてとれる。要するに、この地域のナーイーの約3分の2は、「床屋」と小規模な農業の組み合せによって生活を維持している、第2のカテゴリーに属する世帯であり、残りの世帯のうちの半数ほどは、小規模な農業にもっぱら依存する、第3のカテゴリーに属する世帯であるといえる。そして残余の世帯は、この地域ではむしろ例外的な通勤賃労働によって主に生活を支えているのであり、その一部は高等教育を受けて教職についているほか、郵便局、警察などで下級公務員として勤務している。この最後のグループに属する世帯は、地域のナーイーの約6分の1を占めており、その比率は、地域住民の中でも、ブラーマンのようにとりわけ男子の高等教育に熱心なカーストにおけるそれと比較しても、かなり高いといってよい。[19]すなわち、世帯の約3分の2が、いわゆるカーストの「伝統的」な職業に現在も従事している反面、通勤賃労働への依存の比率も高いという点が、この地域のナーイーの、他カーストとの対比における職業構成上の特徴として、指摘できるように思われる。

以下では、カーストの「伝統的」な職業としての「床屋」に従事しているナーイー成員にしぼって、その活動と社会的役割、位置づけを記述、検討してゆく。

(2) 「床屋」としてのナーイー

「床屋」としてのナーイーの果たすサービスの内容が、必ずしも調髪、ひげそりといった、理髪師としてのそれのみにとどまらず、さまざまの儀礼的役割の執行やメッセージの伝達、さらには助産婦など、かなり広範囲に及ぶものであることは、すでに多くの研究者によって指

摘されているが、[20]実際に個々の「床屋」としてのナーイーが、どのようなサービスを行うかは、そのサービスの相手との関係のありかたによって、すなわち特定のパトロンとしての顧客(ジャジマン *jajman*)とその「世帯がかえの職人」(プルジャン *purjan*)との関係(いわゆるジャジマニ関係 *jajmani* relationship)においてサービスをするか、あるいは不特定の顧客に対して市場や店舗などでサービスをするか、によって、著しく異なる。そこで、まず対象地域における「床屋」としてのナーイーの、顧客との関係のありかたを、具体的にみておく。

世帯番号	職業としての位置づけ		顧客との関係				ジャジマン世帯数(概数)	ジャジマンの分布(Ⅰ～Ⅸは村落番号)											備考
	主	副	ジャジマニのみ	ジャジマニ主	ジャジマニ従	ジャジマニなし		集落数	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	その他	
1		○	○				35	3	○◎									○*	
2	○			○			30	3	○●									○*	
8	○			○			45	2	◎◎										
9	○			○			35	3	○○									○*	
10	○			○			45	2	◎◎										
11		○			○		30	2	◎									○*	
12		○				○	0	—											
15	○		○				65	6	◎	○	●●		○		○				
16	○		○				60	5		○	●○○				◎				
17	○		○				45	5	◎◎	●	○		●						
18	○		○				50	4		◎	●○				○				
19	○			○			15	3		●	●○								
20	○				○		10	2		●	○								Ⅲに店舗をもつ
21	○		○				20	3		●	●				○				
24		○		○			10	1			○								
25		○		○			15	2			○○								
26		○	○				35	3			◎○○								
27	○				○		15	2			○○								
28		○				○	0	—											
29		○		○			30	2			◎○								
30		○				○	0	—											
31	○			○			30	3			◎●○								
35		○		○			10	1			○								
36	○			○			30	3			●	◎			●				
37	○			○			35	4			●	◎			○	○			
38	○		○				60	6	●						○●◎			●○**	
40	○		○				40	4							●●◎			○**	
計	17	10	9	12	3	3			集落内のジャジマン世帯数 ＿は自集落 ●1～5, ○6～10, ○11～15, ◎16以上										
	27		27																

ジャジマンの世帯数(平均)
- 顧客との関係—ジャジマニのみ 45.6
- ジャジマニ主 27.5
- ジャジマニ従 18.3

* 村落はGoni
** 村落はJagsara

表－4 「床屋」であるナーイー世帯の顧客との関係

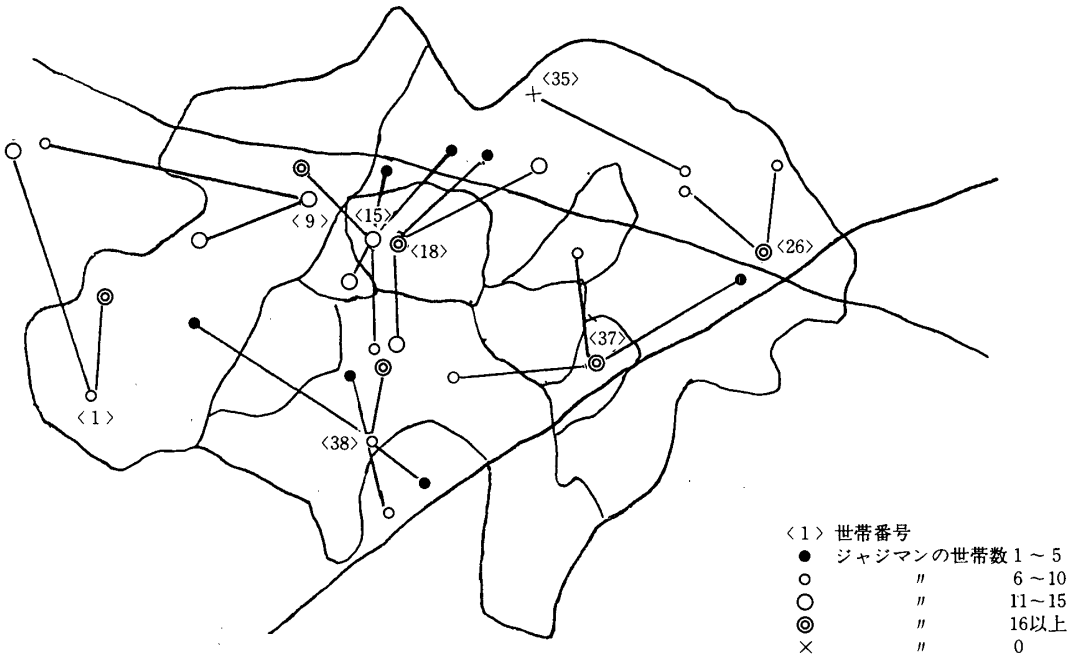
1） ナーイーの顧客との関係

職業としての「床屋」に従事しているナーイー世帯の、実際の顧客との関係がどのようなものであるか、すなわちどの程度の数のジャジマンをどのような範囲にもっており、全体としてジャジマニ関係が「床屋」としての職業の中でどれほどの比重を占めているかをまとめると、表－4のようになる。

表－4からあきらかなように、これらのナーイー世帯の90%近くは多少ともジャジマンとの関係を保っており、かつ80%弱は、ジャジマンに対してのみ、ないしは主にジャジマンに対して、「床屋」としてのサービスを行っている。特に、「床屋」を世帯の主な職業としている17世帯についてみれば、ジャジマンを持たない世帯は皆無である。この地域で「床屋」を職業としているナーイーにとって、ジャジマニ関係のもつ意味は、不特定の顧客に対するそれに比べ、圧倒的に重要であると見てよいであろう。

ちなみに、この地域には若干の「床屋」を職業とするムスリムが存在するが、彼らの活動の場は、定期市や店舗でのそれに限られ、プルジャンとして特定の世帯とジャジマニ関係を結ぶことは、ありえない。

この地域では、個々の「床屋」としてのナーイー世帯がもつジャジマンは、一般に遠くてもせいぜい半径3㎞前後までの範囲内の、多くとも6つまでの集落に分布している。その分布の状態を、若干の事例について図示すると、図－3のようになる。



図－3 ナーイーのジャジマンの分布

ナーイーがもつジャジマンの数は、表－4からも、10～65とかなりの幅があるが、一般には50戸程度のジャジマンをもっていれば、ナーイーはそれだけで生活を維持してゆけるといわれている。表－4からは、たしかにジャジマンを多くもつ世帯ほど、「床屋」を主な職業とし、かつジャジマニ関係に重点をおいている傾向はよみとれる。ただ、「床屋」のみで生活を維持しているナーイー世帯が存在しないことも事実であり、ジャジマンの多少のみが、ナーイー世帯の経済水準を示しているともいいがたい。

ジャジマニ関係は、原則として世帯間で結ばれ、世代をこえて継承されるが、プルジャン世帯に複数の継承者がいる場合、ジャジマンの分割はプルジャン側の任意である。多くの場合、ジャジマンは息子達の間で均分的に相続されるが(表－4の世帯番号15、16、17の間、及び36、37の間)、ときにはかなりかたよった配分がなされたり(同、18、19の間)、一方のみがすべてを継承したり(同、30、31の間)と、さまざまなケースがありうる。

一般にジャジマニ関係は、この地域では、不特定の顧客との関係に比べて、プルジャン側に有利であるとされている。[21]そこで近年では、多くのプルジャンをもつことは、経済的には負担が大きいという理由で、ジャジマン側はなんらかのきっかけを把えてプルジャンとの関係を断ちきろうとする傾向もあり、プルジャン側が新しいジャジマンを獲得することは困難であるといわれている。また、若い人々の中には、町の常設店舗の「床屋」の方が設備や技術もよく、髪型の流行などにも敏感だという理由で、プルジャンとしてのナーイーとの関係がありながら、しばしばアトラウリなどの店舗の「床屋」へ出かけてゆく者もいる。

ところで、この地域において、ジャジマンとして、ナーイーをはじめとするさまざまのサービス・カースト世帯をプルジャンとし、ジャジマニ関係を結ぶのは、そのほとんどが、先にのべた第1のカテゴリーに属する、それもヒンドゥー上層カーストの地主、自作農民などの世帯で、それらの世帯が、地域の世帯全体の中で占める比率は、すでに見たように、おそらく4分の1程度にすぎない。

ナーイーの中には、第2のカテゴリーに属する他の特定カーストの特定の世帯と、それぞれの「伝統的」な職業に基いて、現金や穀物の支払いをともなわずに、製品やサービスを互酬的に交換する関係を結んでいる例がある。たとえば、あるナーイー世帯は、同じ村内に住むバライやクマール世帯との間でそのような関係を結び、毎月1回、相手の家で男性成人に対し調髪、ひげそりのサービスをするのに対し、バライからは必要に応じて木製品の修理のサービスを受け、クマールからは年4回、一定数の土器の供給をうけている。しかし、このような関係を結んでいる世帯は、ナーイーの中でも少数で、かつ、その関係の重要性はナーイーにとっても、相手方にとっても、決して大きなものではない。ここでは、経済的にみる限り、[22]ジャジマニ関係とは、基本的に第1のカテゴリーの世帯と、第2のカテゴリーの世帯の間の関係であるといってよい。

一方、この地域のほぼ4分の3にあたる、プルジャンとしてのナーイーをもたない世帯の

成員は、「床屋」のサービスを、必要に応じて任意の相手から受けていることになる。具体的には、彼らは「床屋」である任意のナーイーを家へ呼び、ないしはナーイーの家へ行って、サービスを受けるか、または定期市の「床屋」、ないし常設の店舗をかまえている「床屋」へ出かけ、サービスを受けるかする。ただし、表－5にみるように、この地域の定期市で「床屋」を営んでいるのは、そのほとんどがカーストとしてのナーイー成員ではなくムスリムであり、常設の「床屋」の店舗をかまえているのも、その大部分はムスリムである。

市場名	市の種類	月日 (1989)	「床屋」の出店者数			
			露店		常設店	
			ナーイー	ムスリム	ナーイー	ムスリム
Baheria	定期市	11.7	－	3	－	1
Atrauli	〃	10.31	－	12	1	2
Goni	〃	11.8	－	1	－	－
Gondwa	〃	12.3	－	3	－	3
Jangleshwar	メーラー	11.13	6	－	－	－

表－5　市と店舗の「床屋」

ナーイーにとって、一般に不特定の顧客に対する職業としての「床屋」とは、個別に顧客の家へ呼ばれるか、または自分の家へ来る人々に対するサービスであって、不特定といっても、全く未知の相手ということはまずない。ナーイーは、いわゆる「不可触」カーストであるチャマル、ドビ、ダヌクなどに対しては、相手の「不浄性」のゆえに、サービスをしない。ナーイーが市や店舗で「床屋」を営業しないのは、そのような場所では顧客のカーストを確認できないためである、という。[23]ただ、ヒンドゥー寺院や聖地での祭礼にともなう大市(メーラー *mela*)へは、多くのナーイーが「床屋」を営業するために出かけてゆく。これは、そこでムンダン(*mundan* 新生児の髪をはじめて切る通過儀礼)を行うために子供を連れてくる人々を主な対象としており、その儀礼の執行には、ナーイーの参与が不可欠だからである。[24]

全体としてみれば、この地域ではナーイーの「床屋」は、主にジャジマニ関係を通じて、世帯数の4分の1程度を占める第1カテゴリーの上層農民の多くを、またムスリムの「床屋」は、市や店舗を通じて、世帯数の3分の1程度を占める「指定カースト」やムスリムの第2、第3カテゴリーの住民を、それぞれ顧客層として確保しているわけであり、したがって残りの、やはり第2、第3のカテゴリーに属する人々をめぐって、両者は競合していることになるが、実際に両者が活動する場は、かなり明確に分離しているといってよい。

2)ジャジマニ関係におけるナーイー

プルジャンであるナーイーがジャジマン世帯の成員に対して行うサービスは、大別して日常的、定期的なそれと、儀礼時のそれとに分かれる。

前者の中でもっとも基本的なサービスは、ジャジマン世帯の成人男性[25]に対する調髪、ひ

げそりである。ナーイーは、通常、週1回ないし2回、ジャジマンの家をたずね、成人男性のひげそり(毎回)と調髪(月1～2回、必要に応じて)を行う。訪ねるのナーイーの男性で、既婚男性が中心だが、ナーイーの世帯内に複数の男性がいる場合、誰がゆくかはナーイー側の任意であり、また訪問する曜日や時間も特に定まっていない。ジャジマン世帯のメンバーが不在であれば、特にあらためて出直すことはせず、次の機会にもちこされるのが普通である。ナーイーが携えてゆくのは、一般に、はさみ、かみそり、砥石片と水を入れる小さな容器位で、石けん、鏡、くしなどは必要ならジャジマン側が用意するが、全く用いられないことも多い。サービスは家のベランダ、中庭、軒先などで行われ、所要時間は1人あたり5分からせいぜい15分程度である。ジャジマン世帯に成人前の男性メンバーがいる場合には、彼らも月1度位の割合で調髪のサービスをうける。ナーイーはサービスが終ったあとも、時としてしばらく雑談をかわしてゆくこともあり、1日に5～6軒から多いときには20軒近くのジャジマンの家をまわってゆく。

プルジャンとしてのナーイー世帯のメンバーで、ジャジマンに対し定期的なサービスを行うのは、男性ばかりではない。ナイン(Nain、ナーイーの女性で、既婚女性に限られる)は、1ヵ月ないし2ヵ月に1回程度、ジャジマンの家を訪ね、既婚女性の爪切りの他、、髪の手入れ、手足にヘンナで模様を書くこと、幼児の世話など、細々とした身のまわりの世話をしてゆく。サービスは基本的には室内、ないしは外部の男性の入ってこない中庭などで行われ、ナインはジャジマン世帯の女性と雑談をかわしながら、少くとも1時間ほどはとどまってゆく。この地域では、婚出した娘は、年1～2回、2週間から1ヵ月程度、実家へ里帰りする習慣があるが、そのような女性が世帯内にいる場合には、彼女は当然のこととしてナインのサービスを受ける。ナインも一般に任意の時にジャジマンの家を訪ねるが、上層カーストの既婚女性はパルダー(*purdah* 女性隔離)の規制をうけ、外出の機会も乏しいので、ナインが訪ねてきたときに不在であるというケースは稀である。

ディワーリー(*diwari* おおむね西暦の10月～11月にあたる)やホーリー(*holi* おおむね2月～3月にあたる)といった年間の主要な祭礼の前には、ナーイーやナインのサービスは、とりわけ念入りに行われる傾向がある。

ナーイーの男性の場合、相手によって訪問の頻度に多少差があっても、すべてのジャジマンの世帯を、原則として週1回は必ず訪れるのに対し、ナインは必ずしもすべてのジャジマンの世帯を定期的に訪ねるわけではないし、ナイン自身も毎日のようにジャジマンを訪ねてまわるわけでもない。ナーイーの世帯にとって、男性メンバーがジャジマンを訪問することはもっとも基本的な仕事そのものであるのに対し、ナインのそれは、ジャジマンとの関係にとって不可欠であるとはいえ、補足的な仕事であるといえよう。ある意味では、ナインの訪問がひんぱんなことは、ジャジマンとプルジャンの世帯間関係がより密接であることを示している。

プルジャンとしての上記のような日常的、定期的なサービスに対し、ジャジマン側は、サービスそのものと直接ひきかえに、その場で支払いをしたり、ふるまいをしたりすることは、まずない。支払いは、年２回、収穫期の後で穀物によってなされ、その量は、ジャジマン世帯の成人男性１人について１回１マウンド(mound この地域ではおよそ20kg、したがって年間成人男性１人に対し約40kg)と定められている。[26]支払いにあてる穀物の種類は規定されておらず、なんでもよいことになっているが、実際にはジャジマンはもっとも高価な穀物(夏作後にはコメ、冬作後にはコムギ)で支払うのが当然とされ、より安価な穀物(たとえばバジュラやジョワール)で支払うのは威信にかかわると考えられている。実際の支払いは、プルジャンが時期をみはからって、個々のジャジマンの家へ受けとりにゆく、という形でなされる。ジャジマン世帯の女性や子供の人数は、支払いには影響しない。

プルジャンとしてのナーイーは、この他に、この地域の年中行事としてはもっともさかんな祭礼であるホーリーの前に、若干のジャジマンからドーティ(*dhoti* 、男性用腰布)、クルタ(*kurta* 、上衣)、サリー(*sari* 、女性用衣裳)などなんらかの衣裳をうけとるが、これは支払いというより、ジャジマンの意志でなされる贈与である。また年間十数回に及ぶ祭礼に際しても、ナインは、他のプルジャンや小作農の世帯の女性とともに、若干の比較的密接な関係にあるジャジマン(ないし地主、一般に同一集落内に住む)の家を訪ね、プリ(*puri,* 揚げパン)、キチュリ(*kichuri,* 米や豆の煮込み)やその他の菓子類など、祭礼用の食物をうけとる。これらもまた、贈与であって、その品目や量もジャジマン側の意志しだいである。さらに、ナーイーを含むプルジャン世帯のメンバーは、ジャジマンの所有する土地で、飼料や肥料、燃料用の草や牛糞などを採取することを黙認される。

上記のようなサービスと支払い、贈与が、プルジャンであるナーイーとジャジマンの世帯間で交される、定期的な交換である。しかし、プルジャンとしてのナーイーとジャジマンの間では、こういった日常的、定期的な交換とならんで、通過儀礼時のサービスと報酬・贈与の交換が、きわめて重要な意味をもっている。プルジャンとしてのナーイー(ナインを含む)のサービスがジャジマンにとって不可欠である儀礼的な機会は、子の出生、ムンダン、ウパナヤム(*upanayam*)、結婚、葬式など、主要な通過儀礼をほとんど網羅しているといってよい。以下では、比較的富裕なブラーマンのジャジマンに対する、プルジャンとしてのナーイーの通過儀礼における役割を略述する。[27]

まず、出産にあたっては、ナインはダヌクの女性とともに、その介護役を果たす。産婦は、初産の場合はほとんど常に、また第２子、第３子あたりまでも多くは、生家へもどって出産するので、ナインも、生家のプルジャンであるナーイーの世帯から来ることになる。ただ、本来の産婆(ダイ *dai*)役は、主にダヌクの女性が果たすのに対し、ナインは出産が近づいてから出産後しばらくの間、ほとんど毎日のように産婦の家を訪ね、細々とした身のまわりの世話をしたり、話し相手になるなど、「不可触」カーストに属するダヌクの女性とはあきらかに異な

る役割をになう。出産後6日目に母子が行う儀礼的なマッサージと水浴(チャッティ *chatti*)の面倒を見るのもナインである。また、新生児が男児であれば、出生後12日目に親族などを招いて祝宴(バラーハ *bharaha*)を行うが、その招待のメッセージを伝えたり、さまざまな宴会の準備のための雑用を行うのもナーイーの役目で、そのような場合、ナーイー世帯の成員が総出で仕事を手伝うことも珍しくない。

男児の出生後6ヵ月に行われるムンダンにおいては、ナーイーは儀礼の中心的役割を演じる。ムンダンは、本来はガンジス河のほとりで行うのが望ましいとされるが、実際には近くの寺院や聖地とされる場所、ないしは自宅で行われることが多く、いずれにせよ髪を切る役目はナーイーであるし、その後の招宴においても、バラーハの場合と同じく、ナーイーは家族ぐるみで、さまざまの雑用に従事する。ウパナヤムにおいても、招宴の伝達、宴の準備の雑用などは、ナーイーの仕事である。

結婚にともなう一連の儀式に際しては、婿側、嫁側双方のプルジャンであるナーイーの成員は、メッセージの伝達、婿をはじめとする男性成員の調髪、ひげそりや、嫁をはじめとする女性の洗髪、爪切り、マッサージ、手足にヘンナで吉祥模様を描くこと、など、ナーイー本来のサービスの他、式場や新居となる家の床の塗りかえ、買物の手伝い、その他さまざまの雑用をひきうける。

さらに、ジャジマン世帯の内部で、特に年長者の死者が出た場合に、その世帯の男性成員の頭髪を服喪のために剃ることも、プルジャンとしてのナーイーの役目である。

これらの儀礼に際してのサービスの他、里帰りした嫁が婚家へもどる際に、実家から携えてきた贈物を、婚家の親族、その他の家々へ配るのも、ナインの仕事とされている。[28]その他、ジャジマンの家で、農業労働や特定カーストの「伝統的」な仕事には属さない、さまざまの雑用のために人手が必要な場合、それを依頼するのは、まずプルジャンであるナーイー世帯の成員である。つまり、プルジャンとしてのナーイーは、「床屋」カーストとしての本来の役割以外の雑多な仕事をもこなす、「雑役係」とでもいうべき性格をもっているといえよう。それら雑多なサービスは、一般にはジャジマンの世帯が豊かであるほどひんぱんになされ、それだけジャジマンとナーイーの世帯間関係も密になる傾向があるといえる。

儀礼に際してのサービスや、その他の雑多な臨時のサービスに対する報酬は、調髪、ひげそりといった日常的、定期的なサービスに対する、量の定まった支払いに比べると、その内容も支払い方法もまちまちで、全体としてはジャジマン側の意向によって左右される傾向が強い。すなわち、報酬の品目は、現金、穀物、衣服、金属製の皿やつぼ、食物、その他さまざまで、その相場も一定しておらず、一般にジャジマンが豊かなほど報酬も大きくなる傾向にある。すなわち、そこでの報酬は単なる支払いというより、多かれ少なかれ、贈与の性格をおびているといえる。その他、ジャジマン世帯での儀礼にともなう祝宴には、プルジャンであるナーイーの世帯成員は必ず招かれ、食事などの供応をうける。

さらに、ナーイーの世帯で子供が生まれたり、結婚式があったような場合には、密接な関係にあるジャジマンは、現金、衣類など、なんらかの贈物をすることが多い。これらの際にナーイーが、ジャジマンを供応したりすることはありえないので、ジャジマンとプルジャンとしてのナーイー間の贈与交換の関係は、一方向的なものであるといってよい。ロダウラに住む比較的豊かなブラーマン農家と、そのプルジャンであるナーイー世帯との間の、サービスと報酬、贈与の授受の関係をまとめると、表－6のようになる。

	サ　ー　ビ　ス	報　酬・贈　与
定期的	週 2 回　ひげそり（成人男性 1） 2 週 1 回　調　髪（成人男性 1、未成年男性 2） 月1～2回　爪 切 り、マッサージ（成人女性 1）	年 2 回穀物（各 1 マウンド） 年 1 回古着（ドーティ、サリー） 所有地内での草刈り、牛糞拾いなどの黙認
随時	メッセンジャー 嫁が生家から持参した土産の配布	現金（2～5ルピー） 穀物、食物
通過儀礼時	出生　産婦の世話 新生児の沐浴 チャッティ　母子の沐浴、マッサージ バラーハ ムンダン　儀礼的断髪 ウパナヤム 結婚式　婿、嫁の世話 葬式　近親男性の剃髪 これらを通じて招宴のメッセンジャー、宴の準備、その他の雑用	現金（11～101ルピー） 衣類（ドーティー、サリー） ブラス、ステンレスなどのつぼ、食器 穀物 食事の供応 食物
年中行事	特になし	食物

表－6　ナーイーとジャジマンの、サービスと報酬・贈与
（ロダウラ、ブラーマン上層農民世帯の事例）

儀礼的サービスやその他の雑多なサービスに対するジャジマンからの報酬、贈与は、ナーイーにとっては不定期で、必ずしも確実にあてにはできないものであるとはいえ、定期的、日常的なサービスに対する、確実に予定しうる収入とならんで、あるいはしばしば、それ以上に重要な収入源である。両者の比が実際にはどれほどのものであるかは、ナーイーの世帯ごとに、また年度ごとに異なるが、一般的には、同一集落内に富裕なジャジマンを多くもつほど、より多くの贈与やそれに近い性格を帯びた不定期の収入に恵まれる可能性が高いといえる。ただ、このような贈与は、常に経済的、社会的に上位に立つ者から下位の者への「施し」という意味あいを帯びる。すなわち、もともとジャジマンに依存する存在としてのナーイーは、それらの贈与を受けとるたびに、その従属的な地位を再確認し、強化されるということになる。

3)不特定の顧客との関係におけるナーイー

この地域の人口の、少くとも4分の3ほどの人々は、ジャジマンとなることはないにせよ、他のカースト成員が造る製品や行うサービスを、日常的にも、儀礼的にも(とりわけヒンドゥー教徒の場合)必要とすることに、変りはない。そのような必要を充たすために、人々は、そのつど、特定カーストに属する人々の家ないし店舗、あるいは定期市などを訪ねることになる。ナーイーにとっての不特定の顧客とは、そのような人々である。

もっとも、これらの人々は、一般にジャジマニ関係において、日常、ナーイーが行っている、ひげそりや女性の爪切りなどを、わざわざ「床屋」にさせることは、まずない。彼らが「床屋」のサービスを受けるのは、1ヵ月ないし2ヵ月に1度、調髪をするときぐらいで、その際には、もよりのナーイーの家へ行くか、定期市の、多くはムスリムの「床屋」のサービスを受けるか、のどちらかである。その選択はもっぱら顧客側の意志しだいであるが、いずれにせよ支払いは、その場で現金で行う。顧客と「床屋」との関係は、世帯間というより個人的で、かつその場で完結する純粋に経済的な、サービスに対する支払いのそれである。

日常的には特にナーイーのサービスを受けない人々であっても、いわゆる「不可触」カースト以外のヒンドゥー教徒であれば、主要な通過儀礼に際しては、本来はナーイーのサービスが、多少とも不可欠である、とされる。しかし現実には経済的な事情から、それらはしばしば省略され、ないし最小限にとどめられる。たとえば出産においては、多くの場合、産婆としてのダヌクの女性は呼ばれるが、ナインが呼ばれることは稀であるし、チャッティやバラーハが行われることも少い。ムンダンはしばしば行われるが、その際は祭礼にあわせて寺院等へ子を連れてゆき、そこに出店しているナーイーに髪を切らせ、若干の祝儀をともなう支払いをする例が多く、集落内や近隣に住むナーイーのサービスを受けることは稀である。彼らがほぼ例外なく近隣のナーイーを呼んでサービスを受ける儀礼的な機会は、結婚式と葬式であるが、そのような場合にも、調髪、ひげそりといったナーイー本来のサービス以外の、メッセンジャーや雑用などをさせることはまずないといってよい。報酬は現金でなされることが多く、贈与というより単なる支払いの性格が強い。また、それらの儀礼にともなう宴で、ナーイーが供応をうけることもあまりない。要するに、不特定の顧客とナーイーとの関係においては、儀礼的な場面でのナーイーのサービスに対する報酬であっても、それが贈与としての性格を帯びることは少く、したがって、両者の関係は、ジャジマンとプルジャンのそれとは異なり、基本的に対等のままであり続けるのである。

(3) ナーイーの位置づけと特徴

以上から、対象地域のナーイー・カーストにおいては、その「伝統的」職業としての「床屋」が、現実にも主要な職業であること、その職業としての「床屋」を営むナーイー世帯にとっては、地域の人口、世帯数からは4分の1程度を占めるにすぎない上層農民をジャジマンとするジャジマニ関係が、一般にもっとも重要であること、そしてそのジャジマニ関係において

は、日常的、定期的なサービスに対する支払いとしての報酬とならんで、ないし、しばしばそれ以上に、儀礼的なサービスや不定期の雑役などに対する報酬、それも「施し」の性格を帯びた贈与をともなう報酬が、きわめて大きな意味をもつことなどが、あきらかになった。

筆者はさきに、この地域では、一方である程度、定期市や常設の商店街などが発展しており、特定のカーストの「伝統的」職域と結びついたものやサービスは、それらの場でも充分に供給されていること、しかし他方ではナーイーをはじめ、バニア、バライ、ロハール、クマール、ダヌクなどの諸カースト成員をプルジャン(バニアの場合、トウラ *toura*)とするジャジマニ関係が、なお現在もかなり広範囲に維持されていること、その関係においては支配的な力を行使しうるはずのジャジマン側が、少くとも経済的には不利であるとみなされており、事実もおそらくその通りであること、などを述べ、にもかかわらずそのような関係が維持されている理由とその背景について検討した。その結論として筆者は、上層農民がなおジャジマニ関係を維持し続けようとするのは、なによりもその解消が、彼らの世俗的な威信を損う可能性をもつからであり、かつ、その威信とは、ジャジマン－プルジャンという当事者間双方の支配・保護－従属・依存という直接的な関係のみならず、その関係を認知する多くの第三者の評価に影響されるものであること、このような状況が成りたつのは、この地域が現在もなお、全体として自給用の穀物を主作物とする「農民社会」(peasant society)的性格を色濃く残しており、ジャジマンであるような地域のエリートが、従来からの地主・自作農層という、いわば伝統的な存在であること、などを指摘した。[29)]

とはいえ、この地域でも「自由」な市場交換原理の浸透は、定期市や商店街の存在や、そこへの外部からの工業製品の流入、さらには、従来、特定カースト成員のみが「伝統的」な職域としていた分野へのムスリムの進出(たとえばムスリムの「床屋」や「鍛冶屋」の市での活動)などに見られるように、決して無視できない。そしてこの地域の多くのカーストの間で、その「伝統的」職業やジャジマニ関係が、同じように広く、ないし強固に維持されているわけでもない。たとえば、ロダウラには13のカースト成員が居住しているが、それらの「伝統的」職業への従事の度合い、ジャジマニ関係維持の度合いを、カーストごとにまとめると、表－7のようになる。

ロダウラの事例がこの地域の傾向を全体として代表しているとは断言できないが、ここからナーイーは、今日まで、他の「職人」、「サービス」カーストに比べ、その「伝統的」な職業とジャジマニ関係をより強く維持してきたカーストであることが、ある程度よみとれる。そしてこのような傾向は、先にあげた他の地域の「床屋」カーストに関する報告とも、ほぼ一致する。[30)]

このような傾向を支える理由として、まず指摘できるのは、「床屋」カーストの「伝統的」職業そのものの、経済的特性である。たしかに「床屋」カーストの「伝統的」職業の内容は、地域によって多少変異はあるにせよ、[31)]基本的には人が人に対して直接、接して行うサービスそのものであり、ものを扱うそれのように資本や原材料も必要とせず、かつ一時に大量生産し、保

カースト	「伝統的」職業	世帯数	「伝統的」職業に従事する世帯数	「伝統的」職業の位置づけ		ジャジマニ関係					備考
				主	副	のみ	主	従	なし	かって有	
Brahman	司祭	29	1		1			1			
Kayastha	書記	3	0								
Yadav	牧牛	5	0								
Bania	商業	7	4		4	3		1			「トウラ」として働く*
Barhai	大工	9	7	7			2	2	3		
Nai	床屋	9	7	7		5	1	1			
Teli	搾油	3	0							2	
Bhurji	穀物焙煎	1	1	1					1	1	
Kahar	水運び	3	0								一部世帯が上層農民の儀礼時に「伝統的」職業に従事する
Arakh	葉の食器製作	29	0								
Chamar	革加工	12	2	1	1		1	1			
Dhanuk	竹製品製作	5	5	5		2	2		1		
Muslim	仕立	1	1	1					1	1	Darjeeとよばれる
計		116	28	22	6	10	6	6	6	4	

*トウラ（*toura*、計量人を意味する）については鹿野：1991，45参照

表－7　ロダウラにおける「伝統的」職業とジャジマニ関係（カースト別）

存をしたり、長距離を輸送したりするにはなじまないという特徴をもつ。[32]

だが、いうまでもなく、それだけでは、なぜナーイーという特定カースト成員が、一方では、ムスリムが市や店舗を通じて「床屋」の職域にかなり進出しているにもかかわらず、なおジャジマニ関係における「床屋」職を独占し、かつ強固に維持し続けているかを説明しえない。

この点について、Parryは「床屋」カーストの果たす役割の儀礼的意味あいを強調する。Parryによれば、「床屋」カーストが行うサービスは、それ自体儀礼性を帯びており、特に儀礼時に行うサービスは「床屋」カーストの成員によってなされることが、儀礼の正当性にとって不可欠である。そしてカミン（*kamin*、プルジャンとほぼ同義）である「床屋」が儀礼時のサービスに対して受けとる報酬は、ブラーマンの司祭が受けとるそれと同じく贈与（ダーン *dan*）であって、他の諸「職人」、「サービス」カーストの受けとる支払いとは区別される。すなわち、「床屋」カーストは、ブラーマン司祭とともに、むしろ儀礼的専門職であって、このような仕事を「伝統的」職業とするカーストのジャジマニ関係は、技術的な専門職としての「職人」諸カーストのそれに比べ、市場経済の影響をうけにくい、というのである。[33]

ジャジマニ関係の多様な内容を、そのサービスや報酬の性格の相異にかかわらず、支配的カーストとその他の諸サービスカーストの間の関係として一律に扱うのは妥当ではないとするParryの指摘は、たしかに正鵠を射ており、それは従来社会人類学で用いられてきた「ジャジマニ・システム」という概念そのものの再検討を迫っているともいえる。[34]

しかし、以上のようなParryの考え方は、本稿が対象とする地域に関する限り、そこでのナーイーのジャジマニ関係維持の要因として、それだけでは充分な説得力をもたない。たしかに

この地域においても、ナーイーの儀礼的なサービスは、ムスリムの「床屋」では果たしえないものである。けれども、それらのサービスは、実は必ずしもプルジャンであるナーイーによらずとも、必要に応じて任意のナーイーを呼ぶなり、ムンダンの場合のようにメーラーへ出かけていって、そこに出店しているナーイーに依頼するなりすれば、受けられるのであり、そうしたところで、儀礼の正当性やサービスの受け手の、いわゆる「浄性」がおびやかされるわけではない。他方、日常的な「床屋」のサービスについては、市などのムスリムの「床屋」にさせても、あるいは自分ですませてしまっても(ひげそりや爪切りなどは、なにも専門の職人にまかせなければならないような、技術的困難をともなう仕事ではない)、やはりそれ自体、「浄性」にかかわることはないのである。そして、すでにのべたように、ジャジマニ関係を維持することは、経済的には一般にジャジマン側に不利であると認識されており、事実もおおむねその通りであるとみてよい。

筆者はさきに、この地域におけるジャジマニ関係維持の主要な要因として、それが上層農民の世俗的な威信にとって重要であり、その解消は威信を損う可能性があることを指摘したが、[35]ここではこの点と関連して、プルジャンとしてのナーイーの、情報伝達者としての役割に、特に注目したい。

ナーイーはすでにのべたように、日常的にジャジマンの家々を巡回してゆく際に、調髪、ひげそり等のサービスを終えた後も、しばらく雑談してゆくことが珍しくない。ナインの場合には、むしろ爪切りなどの表むきのサービス以上に、雑談が重要な意味をもつように思われる。定期的に数十軒の家を渡り歩き、それぞれの家の内情に通じているナーイー、ナインのもたらす情報は、それ自体貴重なものであり、とりわけパルダ規制の下で外出の機会の乏しい女性にとって重要な意味をもつが、ジャジマン側にとっては、それは同時に自らの世帯の内情も、ナーイーに把握されるということを意味する。しかも、ナーイーは儀礼時をはじめとして、必要に応じて、しばしば家族ぐるみでジャジマンの家へ出かけ、通常は家族以外は立ち入らないような室内へも入って、さまざまの雑用を行う。里帰りからもどってきた嫁の持参した土産がどのようなものであるか、儀礼にともなう供応がどのようになされたか、といった、周囲の人々にとっての関心事で、世帯の経済状態や「気前よさ」、つまりは個々の世帯や個人の威信にかかわるさまざまの細かな情報を、プルジャンとしてのナーイーは、常にもっともよく知りうるだけでなく、多くのジャジマン世帯を相互に比較することもできる立場にあるのである。プルジャンとしてのナーイーのもつ、このような特性は、ジャジマンにとっては無視できない力として作用すると思われる。

この点については、しばしば「床屋」カーストとともに、そのサービスがいわゆる「浄性」の維持と深くかかわっていて、儀礼性を強く帯びているとされる「洗濯屋」カースト(ドビ)[36]との対比が興味深い。この地域では、ドビのサービスがカーストの「浄性」を維持する上で重要であるという観念自体はたしかに存在するにもかかわらず、実際には主にジャジマン側の経

済的理由から、ドビはかってのジャジマンのほとんどを失い、その一部が不特定の顧客の個別の注文に応じて「洗濯屋」としての仕事をしている他は、ほとんどが小作、農業労働者に転化している。[37]すなわち、その「伝統的」職業の「浄性」との関係だけでは、ジャジマニ関係を維持する要因としては、充分ではないのである。

しかし、いうまでもなく、プルジャンは基本的にはジャジマンに依存し、従属する存在であり、ナーイーといえども、その例外ではありえない。一方ではジャジマンの威信を傷つけないように、慎重にふるまうことこそが、プルジャンとしてのナーイーに求められる行動であり、それによってのみプルジャンとしての地位が確保されてきたともいえる。ナーイーの側に、ジャジマニ関係を維持してゆく以上に有利な、他の生活の手段がないとすれば、なおさらのことである。両者の関係は、微妙な緊張をともなうバランスの上で維持されてきたのであり、その事情は現在でも変っていないといえるであろう。

4 おわりに

以上から、対象地域におけるナーイーの地域社会内での位置づけと、その特殊性が、ある程度あきらかになったように思われる。基本的に「農民社会」と把えうる対象地域においては、そこで中心に位置するのは、先に第1のカテゴリーとした、ある程度以上の規模の土地を所有する農民であり、その他の住民の位置づけ、特徴をあきらかにすることは、結局、彼らと上層農民との関係をあきらかにすることである。それはすなわち、周辺部から中心の特性を把えなおすことでもあった。[38]

本稿では、周辺部の住民を大きく2つのカテゴリーに分類したうえで、第2のカテゴリーに属する集団の例として、ナーイー・カーストの成員をとりあげた。この地域の住民を、カーストを単位として、その「伝統的」職業との関連から位置づけようとすることは、一般的には、必ずしも常に妥当性をもつとはいえない。たとえば、ブラーマンやアラク、チャマルのほとんどは、現在、なんらかの形の農業によって生活を支えているが、その人口構成上の比率から考えれば、過去においても、それらのカースト成員の大部分は、実際にはそのカーストの「伝統的」職業に従事していなかったであろうことが、ほぼ自明である。[39]一方、テリ、ドビなどの場合、現在、その「伝統的」なカーストの職業に従事している者の比率はごく小さいが、かつては少くとも現在よりは多くの成員が、実際にそれぞれの「伝統的」な職業で生活を支えていたと考えられる。要するに、カーストによって、地域によって、また時代によって、カースト成員の「伝統的」職業と実際の職業との整合性も、また地域の中心的存在である農民との関係のありかたも、さまざまであり、可変的でもある。[40]この地域におけるナーイーの場合は、カーストの「伝統的」職業と実際の職業との整合性の高さ、世帯間の世襲的関係としてのジャジマニ関係の強固さ、などにおいて、現状ではむしろやや特異な、とはいえ一つの典型的な事例を示し

ているように思われる。

南アジア農村の地域社会においては、いうまでもなく、住民は経済的にも政治的にも、また社会的にも宗教・儀礼的にも、さまざまに分化、成層化されており、それらのどの側面を重視し(例えば階級かカーストか)、どのようにその相互関係を性格づけるか(例えば搾取的か互酬的か等々)が、これまで多くの研究者によって論じられてきた。ここでその詳細に立ち入る用意はないが、[41]いずれにせよ、それぞれに異なる性格をもつ集団成員間の関係についての、具体的な資料の蓄積がなお不充分であることは否めない。

たとえばPARRYは、先にもふれたように、ジャジマニ関係における報酬の性格に注目し、主に技術的な労働を行い、「支払い」を受けるカースト群(例えば「大工」や「土器つくり」)と、主に儀礼的なサービスを行い、「贈与」を受けるカースト群(ブラーマンと「床屋」を典型とする)を区別することで、[42]また、RAHEJAは、一般にジャジマニ関係(および親族間関係)において重要な意味をもつ贈与(ダーン)は単なる支払いと異なり、「不吉さ」(in auspiciousness)を転化する性格を帯びていることを指摘したことで、[43]従来より一歩踏みこんだ視点を提示した。

だが、対象地域のナーイーの事例からは、ブラーマン司祭とナーイーの間では、受けとる報酬(贈与を含む)の性格や、その背景となる上層農民との関係のありかたは、基本的に異なっているし、上層農民がプルジャン(ないし司祭としてのブラーマン)に対してする贈与と、上層農民内部の親族間でなされる贈与(具体的には与妻者側から取妻者側への贈与)を、全く同じ次元で扱うことも、妥当性を欠く。ここでは、ジャジマンによるナーイーへの報酬のありかたの背景には、前者の世俗的威信を支えるとともに、場合によってはそれを脅かす可能性をもつ、情報伝達者としての、後者の独自な役割が存在するが、司祭としてのブラーマンは、おそらくそのような役割をもっていない。ブラーマン司祭のブラーマンのジャジマンとの関係は、一般に通過儀礼のそれに限られ、かなり限定的、断片的だからである。そして、異カースト間のジャジマニ関係における贈与は、ブラーマンがジャジマンである場合についてみれば、司祭へのそれを含めて、常に多少とも社会的上位者から下位者への「施し」の性格を帯びるのに対し、[44]同一カースト内の与妻者から取妻者への贈与は、基本的に、社会的下位者から上位者への「供げもの」の性格を帯びているのである。[45]

この地域におけるナーイーの現在みられるような位置づけが、歴史的にはいつ、どのように形成されたかをあきらかにすることは、本稿の目的と筆者の能力をこえる。ここでは、今後の変化の可能性について、若干の視点を提示することで、結びにかえたい。すでにのべたように、この地域のナーイーのジャジマニ関係が、他のカーストのそれに比べてより強固に維持されてきた背景には、ジャジマンを構成する上層農民の、「農民社会」における伝統的なエリートとしての性格があった。地域社会の変化を主導する力を持つのは、まず何よりも、これらの上層農民であり、彼らが今後、自らの位置を変化させてゆく過程(たとえば自給用の穀物栽培から換金作物栽培への転換、教育への投資を通じての賃金労働者への移行)が、他カースト

との関係、具体的にはナーイーとのジャジマニ関係を、変化させてゆくと考えられる。ナーイーの側の主体的行動が、この変化の過程を直接、左右することは、一般に(たとえばドビがそうであったように)困難であるだろう。[46]ただ、ナーイーに限っていえば、この地域の中ではむしろ例外的といえるほど、比較的多くの成員が高等教育を受け、教師、公務員などの、地域外での賃金労働に進出している一方で、市場経済内での職域としての「床屋」には、むしろあまり執着していない(例えば定期市などへ「床屋」として出店することをあまりしていない)点が、興味深い。ナーイーにとってより重要なのは、ここでは一般的な職域としての「床屋」ではなく、ジャジマニ関係を通じての上層農民とのつながりなのである。いいかえれば、上層農民の変化を通じてジャジマニ関係の維持が困難になってくれば、ナーイーにとって「床屋」というカーストの職域自体、重要性を失うことになるのかもしれない。ただ、その場合でも、現在、ナーイーの果たしているさまざまの儀礼的な役割は、多くのヒンドゥー上層カースト成員にとって不可欠のものであり続けるであろう。そのような場合、彼らとナーイーとの関係が、どのように再編されてゆくか、興味深い問題であろう。筆者自身も、このような視点から、今後の展開に注目してゆきたいと考えている。

謝　辞

調査にあたっては、主調査地ロダウラ村で筆者を暖かく受け入れて下さったUma Shankar Bajpai氏と家族の方々、調査助手であったPramod Kumar Bajpai, Vinod Kumar Bajpai両氏をはじめとする、ロダウラとその周辺の村々の方々に、心より御礼申しあげる。また、石原氏をはじめとする調査団のメンバーには、調査中とその前後を通じてさまざまな援助、協力を頂いた。特に溝口常俊氏には、同氏の資料の一部を使わせて頂いた。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究「南東アジアにおける『正統』の波及・形成と変容」(代表　石井溥氏)でも本稿の大筋を発表し、有益なコメントを得た。記して感謝の意を表したい。

注

1) 本稿は筆者らが平成元年度に文部省科学研究費(海外学術調査)を受けて行った「インド亜大陸農村における市とそれをめぐる商人集団の研究」(代表者　石原潤)の報告の一部をなすものである。筆者自身の現地調査期間は1989年10～12月の約1ヵ月半である。

2) たとえばAhmad ed.：1973, Leach ed.：1960, Singh ed.：1977など参照。

3) この場合、同一カーストの成員が、必ずしも経済的、社会的に同一階層に属するとは限らないにもかかわらず、しばしば等質的な集団として扱われるきらいがあったことは批判されねばならない(MacDougall:1980, 鹿野：1991,40～43,61(注17)参照)が、この点はしばらくおく。

4) これにつけ加えれば、農業部門をになう人々の中でも、そのカースト成員の多くが小作、農業労働者などに属するような諸カーストの側からの研究も、同様に乏しいといえようが、本稿ではこの点を論じる用意がない。

5) 南アジアの村落における「職人」層についての抱括的論考としては、中山：1989があるが、その関心は主に

技術的、経済的側面に限定されている。

6）筆者は先にものを扱うカーストの例として「土器つくり」カーストを取りあげ、バングラデシュ中部の事例に基いてやや詳細に論じたことがある（鹿野：1987）。

7）この区分は、もちろん厳密なものでない。若干のカーストは、ものを製作すると同時にサービスにも従事する。例えば革加工をするカーストが、自らが製作した太鼓をたたく楽師を兼ねる例は少くない。

なお、司祭職を含む、宗教・儀礼的な職能を「伝統的」な職業とするカースト（ブラーマンを含む）を「サービス」カーストと位置づける視点は、状況によって有効となろうが、本稿においては、本格的に論ずる用意がない。重松：1991, Van Der Veer：1985などを参照。

8）例えば北インドについては、Parry：1979をはじめ、Lewis：1958, Majumdar：1958, Raheja：1988, Wiser：1958などが、ベンガルについてはFruzzetti：1982, 南インドについてはHanchett：1988などが、代表的なものとしてあげられよう。

9）Census of India：1981。これら行政村は、それぞれ1～14の自然村を含んでいるが、一方で若干の自然村は、複数の行政村にまたがっており、両者の関係は単純でない。

10）Ishihara ed.：1991, chap.l, 6および鹿野：1991, 38-43参照。

11）表－1からもあきらかなように、対象地域における世帯あたりの平均耕地所有面積は1haを下まわる。ロダウラの事例については、鹿野：1991, 39-41, 58-60参照。

12）カースト別の近年の人口統計は存在しないが、20世紀初頭の統計によれば、ハルドイ県には約70のカースト成員が存在し、それらのうちの人口面で主要なカーストが人口全体に占める比率は、チャマル17.5%、ブラーマン11.8%、パシ（Pasi）9.0%、ヤダヴとラジプートがそれぞれ8.0%であった（Nevil：1904, 73-89）。ただしカーストによっては、その分布はハルドイ県内でもかなり地域差があり、たとえばパシはサンディラ郡を含むハルドイ県東部には少く、アラクは逆に東部に集中しているといわれる。

13）鹿野：1991参照。

14）ロダウラ村については、第1のカテゴリー、第2のカテゴリーに属す世帯がそれぞれ30%、第3のカテゴリーに属す世帯が約40%と算定される（鹿野：1991, 40-43）。ただしロダウラは、この地域としては、商業、手工業、サービスなどをカーストの「伝統的」職業とする第2のカテゴリーに属する世帯が比較的集中している集落である。

15）この点は、他の、特定カーストの「伝統的」職業とみなされている職業、例えば鍛冶屋、大工などについてもある程度同様である。ただし、他方では革加工をするムスリムはチャマルとは呼ばれない。

16）この地域のナーイー成員の中には、近年、自称として、もともとはカーストのランクの上ではより上位とされるカヤスタの名称であるバルマ（Barma）やスリヴァスタヴァ（Srivastava）などを用いている例がある。この傾向自体、興味深い問題を含んでいるが、本稿ではこれ以上ふれない。

17）このようなカーストとしての世帯分布のありかたは、上述の第2のカテゴリーに属する世帯の多いカースト、すなわちバニア、バライ、クマール、ブルジ、ダヌクなどに、ほぼ共通する。ただし、同じカテゴリーに属す世帯の多いカーストの中でも、ソナール（Sonar）やナート（Nat）、また対象地域内には居住していないが同様の傾向の強いハルワイ（Harwai,「菓子つくり」）などは、むしろやや町に近い性格をもつ集落に集中している。この点は、後述する、彼らと顧客との関係のありかたに密接に関連すると思われる。

18）調査時点での対象地域の世帯総数はあきらかでないが、この数十年の増加傾向からは（センサスによれば、この地域の世帯総数は1961年-1509、1971年-1802〔1961年比19.4%増〕、1981年-2436〔1971年比35.2%増〕）、1989年時点で3000前後と推定される。Census of India：1981。なお1931年のセンサスによれば連合州におけるナーイー・カーストの人口比は1.83%であったとされる（多田：1990, 115による）。

19）ブラーマンが支配的カーストであるロダウラの場合（116世帯中29世帯がブラーマン）、ブラーマン世帯の中で通勤賃労働が主な職業である世帯は存在せず、重要な副業である世帯も2戸のみである。鹿野：1991, 41。

20）注8）参照。

21）詳しくは鹿野：1991, 55-58。

22) この留保は、司祭職としてのブラーマンをどのように位置づけるかという問題とかかわっている。ただ、たとえばロダウラのように、第1のカテゴリーに属する上層農民自身がブラーマンである場合、彼らにとって、司祭職をつとめるブラーマン(パンディット *pandit* とよばれる)との関係は、基本的にはプルジャンとの関係と共通のものとみなされているように思われる。

23) 対象地域の「指定カースト」(scheduled castes, ほぼ「不可触」カーストに相当する)の人口比は29%弱であり(Census of India：1981)、ムスリムの人口比はあきらかでないが、5%を上まわることはないと考えられる。

24) そこでのナーイーへの報酬も、単なる支払いというより、祝儀としての贈与(ダーン)の性格を帯びるため、通常より高額となる。

25) ここでは一般にウパナヤム(聖紐ジャネウ *janeu* を初めて着用する儀礼)をすませた男性を意味する。ウパナヤムの執行自体、かなりの経済的負担をともなうので、何歳前後で行うかは世帯により異なるが、本来20歳前後までにすませるべきものと考えられている。

26) 調査時点での定期市でのコメ、コムギの1マウンドあたりの価格は、季節や品質の差による変動を考慮に入れて、それぞれ60～90ルピーと40～50ルピーであった。調髪とひげそりのサービスは、定期市で1ルピー(調髪のみ)～1.5ルピー(調髪とひげそり)であったから、経済的にはあきらかにプルジャン側に有利といえる。ただし鏡や椅子を備え、石けんを使用するような常設店の「床屋」の場合、調髪、ひげそりの代金は2～3ルピーである。

27) この地域の通過儀礼の詳細とそこでのナーイーの具体的役割については、ほとんど実見する機会がなく、聞き取りのみによる。北インドのそのような事項についての詳細な記述としては、Majumdar：1958, Parry：1979, Raheja：1988など参照。

28) この贈物については、鹿野：1991, 57参照。

29) 鹿野：1991, 55-59。

30) 例えばMajumdar：1958, 35, Parry：1979, 60, 73-81, Raheja：1988, 19など。なお、1931年の連合州全域を対象としたセンサスにおいても、ナーイーはソナール、ドビその他とならび、かなり「伝統的職業」に従事している率の高いカーストであるとされる(多田：1990, 115による)。

31) たとえばカルナタカの「床屋」カーストは、楽師の役割をはたすという。Hanchett：1988, 124。

32) もちろん、おなじくものを扱うカースト相互の間でも、たとえば織物を扱うカーストと土器つくりカーストの間に典型的にみられるように、カーストによって「伝統的」職業そのものの経済的特性は、かなり異なっている。詳しくは鹿野：1987, 122-125。

33) Parry：1979, 59, 72-74, 78-82。

34) この点、ジャジマニ関係の重要性を認めつつ、その体系性に疑問を提示したFullerの指摘に通じる。Fuller：1989, 39-41。

35) 鹿野：1991。

36) Majumdar：1958, 35, Raheja：1988, 19, 25など参照。

37) この地域のドビのかつてのジャジマニ関係に関する資料は乏しいが、ロダウラでも1960年代までは多くのブラーマンが、ドビとジャジマニ関係を結んでいたという。鹿野：1991, 44, 56。なおWadley & Derr：1989, 106-107参照。

38) 農村における農民の「中心性」(centrality)については、Majumdar：1958, Raheja：1988など参照。DerneはRahejaの論考を「周辺」からの視点を欠くとして批判している(Derne：1990)が、本稿では農民の中心性自体をある程度前提としたうえで、周辺からのアプローチを試みている。

39) 一般にあるカーストの大多数の成員が、そのカーストの「伝統的」職業としての手工業やサービスによって生活を維持してゆけるためには、カーストによる職域の独占とともに、そのカーストの占める、全人口に対する比率が充分に小さくなければならないはずである。いうまでもなく、その比率がどの程度であればよいかは、職業によって異なる。

40) この点については、Wadley & Derr：1989, 87-95参照。

41) FULLER：1989, MACDOUGALL：1980など参照。

42) PARRY：1979。

43) RAHEJA：1988。

44) ただ、ジャジマンがブラーマン以外のカーストに属していた場合、そのブラーマン司祭に対する贈与は、少くとも表面的には、社会的上位者に対する「供げもの」の形をとる。すでにのべたように、対象地域でジャジマンとしてジャジマニ関係を結ぶのは上層農民であるが、そのカーストは集落によって、ブラーマン以外にもタクール、カヤスタ、ヤダヴなど、さまざまである。これらのブラーマン以外のジャジマンのプルジャンとの関係のありかたは、ブラーマン上層農民のそれと基本的な差はない。差があるとすれば、カーストによる差ではなく、個々の世帯の経済的、社会的な位置の差であると考えてよい。

45) 鹿野：1991, 58。

46) 鹿野：1991, 48, 51。ただし、周知のようにいわゆる「不浄」な仕事をカーストの「伝統的」職業としてきた諸カーストの場合には、それらの職業を主体的に放棄してゆく例は少なくないが、ナーイーの場合には、このことはあてはまらない。

参　考　文　献

AHMAD, I. ed.

1973 *Caste and Social Stratification among Muslims*, Manohar Book Service, Delhi

DERNE, S.

1990 The Kshatriya View of Caste ; A Discussion of Raheja's " The Poison in the Gift ", *Contributions to Indian Sociology* (n.s.) 24 - 2, 259 - 263

FULLER, C. J.

1989 Misconceiving the Grain Heap ; A Critique of the Concept of the Indian Jajmani System, in PARRY, J. & M. BLOCH ed. *Money and the Morality of Exchange*, Cambridge Univ. Press, 33 - 63

FRUZZETTI, L. M.

1982 *The Gift of a Virgin ; Women, Marriage and Ritual in a Bengali Society*, Rutgers Univ. Press

HANCHETT, S.

1988 *Coloured Rice ; Symbolic Structure in Hindu Family Festivals*, Hindustan Publishing Co.

ISHIHARA, H. ed.

1991 *Markets and Marketing in North India*, Nagoya University

鹿野勝彦

1987 「ベンガル農村のクマール（土器つくりカースト）－バングラデシュ，タンガイル県ミルザプール郡の事例から」，『民族学研究』52-2，103－128

1991 「北インド農村における経済交換と社会関係－ウッタルプラデシュ州ハルドイ県の事例から」，『金沢大学文学部論集行動科学科篇』11, 37-65

LEACH, E, R. ed.

1960 *Aspects of Caste in India, Ceylon and North West Pakistan*, Cambridge Univ. Press

LEWIS, O.

1958 *Village Life in Northern India*, Random House

MAJUMDAR, D. N.

1958 *Caste and Communication in an Indian Village*, Asian Publishing House

MACDOUGALL, J.

1980 Two Models of Power in Contemporary Rural India, *Contributions to Indian Sociology* (n.s.) 14-1, 77 - 94

中山修一
1989 「インド村落における職人の機能と展開」,『南アジア研究』 1, 75-95
NEVIL, H. R.
1904 *District Gazetteers of the United Provinces of Agra and Oudh,* vol.XLI, Hardoi, Nainital
PARRY, J. P.
1979 *Caste and Kinship in Kangra,*Routledge & Kegan Paul
RAHEJA, G. G.
1988 *The Poison in the Gift ; Ritual Prestation and the Dominant Caste in a North Indian Village,* The Univ. of Chicago Press
重松伸司
1990 「サーヴィスカースト・儀礼・村落秩序ー南インドの村落司祭パンダーラムの事例」,『西南アジア研究』33, 1-32
SINGH, H. ed.
1977 *Caste among Non-Hindus in India,*National Publishing House, Jaipur
多田博一
1990 「北インド, ウッタル・プラデーシュ州におけるカースト制度と農業生産」, 押川文子編『インドの社会経済発展とカースト』, アジア経済研究所, 101-139
VAN DER VEER, P.
1985 Brahmans ; Their Purity and Their Poverty on the Changing Values of Brahman Priest in Ayodhya,*Contributions to Indian Sociology,* (n.s.) 19-2, 303-321
WADLEY, S. & B. W. DERR
1989 Kalimpur 1925-1984 ; Understanding Rural India through Restudies, in BARDHAN, P. ed. *Conversations between Economists and Anthropologists,* Oxford Univ. Press, 76-126
WISER, W. H.
1958 *The Hindu Jajmani System,* Lucknow Publishing House (1936)
CENSUS OF INDIA
1981 Part XIII-A. Village and Town Directory. District Hardoi